

## 第 14 話 百恵・友和の結婚、そして昌子と淳子

### ●久々の人気スターどうしの結婚

百恵・友和映画は、75 年のお正月映画として『伊豆の踊子』が公開されて以来、同年のゴールデンウィーク（GW）作品として『潮騒』、76 年のお正月『絶唱』、お盆興行『風立ちぬ』、77 年お正月『春琴抄』、お盆『泥だらけの純情』、78 年お正月『霧の旗』、お盆『ふりむけば愛』と、東宝の看板作品として重要な興行を支えてきた。しかも 2 作目の『潮騒』以降は常に 2 本立て番組のメインを張っていた。

本来そういう時期の公開作品は深刻な内容が敬遠されがちなものだったが、百恵・友和映画はそれらしくなく悲劇的結末に終わる作品が実に多かった。

『伊豆の踊子』は、一高生と旅芸人の少女のほのかな心の交流を描くだけで二人は結ばれるに至らない。『潮騒』こそハッピーエンドだが、『絶唱』は駆け落ちしてまで一緒になった二人が戦争で引き裂かれ青年が出征中にヒロインは結核で死ぬ。『風立ちぬ』も同様に、青年が学徒出陣している間に療養中のヒロインが死んでしまう。『春琴抄』は盲目の令嬢が従者の青年の献身的な愛情に心を開くものの、彼女に横恋慕した男から顔に熱湯を浴びせられ、醜い姿を見られたくないという気持を汲んだ青年は自ら針で眼を突き共に暗黒の世界に入る。『泥だらけの純情』となると、ヤクザ同士の抗争に巻き込まれ二人とも死んでしまう。『霧の旗』は復讐譚だし、『ふりむけば愛』のハッピーエンドの後の『炎の舞』は三たび戦争に引き裂かれ、青年は戦死してヒロインは後を追って崖から海に身を投げる。

このように、ほとんどの共演作が悲劇に終わったにもかかわらず、現実の山口百恵と三浦友和は恋をみごとに実らせる。二人は 10 本の共演映画を世に送り出した後、前章に記したような形で実生活でも恋人同士になっていたことを発表し、結婚すると宣言した。

スクリーンの中でコンビを組んで常に恋人役を演じてきた人気スター同士が映画そのままに結婚してしまうのは、絶えて久しい出来事だった。石原裕次郎と北原三枝が 23 本の共演の末に結婚したのは 60 年のことだったが、その後コンビを組んだ人気青春スター同士が実際にも結びつく例はないままだった。浜田光夫と吉永小百合も、黒沢年男と酒井和歌子も、中村雅俊と檀ふみも、また郷ひろみと秋吉久美子も、何本ものコンビ作品を持ちながらそういうことはなかった。

そうした中で山口百恵と三浦友和の結婚宣言には、青春映画がそっくりそのまま現実になったような気にさせられたものである。

## ●オリジナル脚本によるハッピーエンドの傑作——『ホワイト・ラブ WHITE LOVE』

そんな彼らの現実の愛情の深まりが生み出したかのようなハッピーエンドの恋愛映画が、10本目の共演作『ホワイト・ラブ WHITE LOVE』（79 小谷承靖 脚・藤田敏八+小林竜雄 案・中川美知子）である。この作品の公開は恋人宣言の直前であり、もうはっきりと互いを愛し合っていたはずの時期に撮影されていた。

完全に興行的安定を得ていた百恵・友和映画は、もはや原作小説もリメイクとしての先行作も必要とせず、純然たるオリジナルストーリーが可能だった。10作目を記念してストーリー原案が一般公募されたわけだが、その採用作が百恵と友和を等身大の現代の若者として描きハッピーエンドへ導いているというのも、当時のファンが二人を見る眼の反映だったのではないだろうか。

原案を脚本に仕立てたのは、日活出身の藤田敏八監督とシナリオライターの小林竜雄である。小林は、78年に「もっとしなやかに もっとしたたかに」で当時最大の新人脚本賞である城戸賞を受賞し、それがこの年、につかつで『もっとしなやかに もっとしたたかに』（79 藤田敏八）として映画化されたばかりの新進作家だった。友和やわたしと同年の52年生まれで26歳、『もう頬づえはつかない』（79 東陽一）、次の百恵・友和映画『天使を誘惑』（79 藤田敏八）をそれぞれ監督と共同で執筆し、デビュー早々にして年4本のメジャー映画化作品が出るという売れっ子ぶりだった。

忍（山口百恵）は、写真の撮影現場でスタイリストとして働いている。姉は既に嫁ぎ、美容院を営む母（岩崎加根子）と二人で暮らす。画家の父親（小林桂樹）は死んだことになっていたが、実は家族を捨て女と日本から去ったのであり、今はその女性と死別して独りスペインの田舎町で生活しているという。家族中で忍だけが、父の親友・山下（北村和夫）から聞かされて現在の消息を知っていた。

いつか父の許を訪ねようと思いスペイン語を習い始めた忍は、外語学校で、アルバイト教師の健（三浦友和）と知り合った。元スペイン在勤だった健は、勤務していた商社を辞めぶらぶらしている身だというが、外人相手のポン引きをしている安田（岩城滉一）などという怪しげな友人がいたりしていささか不良っぽい。交際を申し込むやり方も強引であり、初め反発した忍だが、付き合っていくうち惹かれるようになっていく。

忍が仕事で大失敗をしでかした晩、二人は大いにヤケ酒を飲み、そして一緒に朝を迎えた。安田の存在を巡って諍いを起こしたりはするものの、忍と健はしだいに深く気持を通わせていく。ただ、健のスペイン時代には何か秘密があるようで、忍は気になっている。スペインで撮ったらしい健と日本人美女の親密そうな写真を偶然眼にして、それが心に引っかかる。

スペインの父が病気だという報せを受け、忍は母や姉には目的を内緒にしたまま山下と

共に旅立つ。その後を追うように、健もスペインへと向かった。マドリッドで山下が発熱し予定外の滞在をする間に、忍は街角で健と一緒に写真に映っていた女性を見かける。その女・多恵子（范文雀）は、なんと「ケン」という名の幼い息子を連れていた。思わず呼び止めて話しかけ健の名前を出すと明らかに動揺した様子があり、忍は心穏やかならない。

そのうえ、父と対面した際山下から思いもよらぬ告白を受ける。父と一緒に暮らしていた出た女性が実は山下の妹であり、彼らの逃避行をけしかけたのは他ならぬ山下自身だといふのである。健と多恵子の関係への疑念に加えて、もうひとつ自分の知らぬところで燃えさかっていた男女の愛情の形の実相を知らされ、忍は胸苦しきでいっぱいになる。二度と会うことのないだろう父と切ない別れを交わし、追いついてきた健と旅を続ける。

忍から多恵子と子どもの件を聞かされた健は、激しく動揺する。とるもとりあえず忍と健が多恵子のアパートを訪ねてみると、そこは身体を売って生活している女たちの住み処だった。闘牛祭の行われている田舎町に出稼ぎに行っているという多恵子を、二人はさらに追っていく。

その旅の途中、忍は健からすべてを聞いた。

——健がスペイン支社にいた頃、多恵子はホステスのアルバイトをしながらフラメンコの修業中であり、健と彼女は深く愛し合う仲だったこと。ところがある夜、酔った支社長（高橋昌也）が多恵子を犯してしまったこと。ほどなく彼女は身籠もり、その子の父親が健だか支社長だか解らないために健と多恵子は苦しんだこと。その末、墮胎を決意してフランスで手術を受けるための一緒に旅する途中、多恵子は健の前から忽然と姿を消し必死で捜しても見つからなかったこと。そして健は会社を辞め日本へ帰ったこと。

健と多恵子は、ついに再会した。子どもの父親が支社長だった事実が解る。それでも、多恵子が健を思い続けている様子はありありと見て取れた。忍は、いたたまれずに街に飛び出す。多恵子は健に、自分は大丈夫だから忍をしっかりと掴まなさいと萬感をこめて言った。泣きながら駆けていくうち祭の主役である牛の群れの暴走に巻き込まれた忍を、追いかけてきた健が命懸けで助けた。そのとき、多恵子がバルコニーから転落して死ぬ。二人を声援するために身を乗り出し過ぎたのか？ それとも自ら身を投げたのか？

残された息子ケン、忍と健は支社長のところへ連れて行き責任を追及して詰め寄る。我が身かわいさに自分の子であると認めようとしぬ支社長と激しく争う健を押しとどめ、忍はきっぱりと言う。「この子はあたしたちで育てましょう」。

ラストシーンは日本へ向かう飛行機便の機内、忍と健の膝の上でケンが無邪気に笑っている。「やり直せるかも知れない」というリフレインが印象的な主題歌「ホワイト・ラブ」（唄・eyes）が流れるうち、画面いっぱい明るい青空が映るのをバックにクレジット・タイトルが流れ、終わると画面中央に飛行機雲がゆっくり END の三文字を描く。

忍は、父親の出奔した家庭に育ちながら少しもいじけることなく仕事に打ち込んでいる女性だ。健は、昔の恋愛の記憶を都合良く消したりできずに痛みとして抱き続けている男

だ。初めて互いの名を名乗るときそれぞれ「忍耐の忍」「不健康の健」と説明するのが、しっかりした性格の忍と偽悪的な健の性格をよく示している。どちらも確たる考え方を持って生きている二人が出会い、恋をし、結ばれる。

極めて味わい深い男女の愛情物語であり、忍と健の間にたゆとう情感がスクリーンの上にもみごとに濃密に示されている。たとえば、ちょっとした行き違いの後に忍の誤解を解こうと健が彼女の家を訪ねる場面、健を送って出た忍が夜の通りを語り合いつつ歩く。ふと、忍が「ラーメン食べない？」と誘う。このとき、先を歩いていた忍がぐるりと振り向いて語りかける姿を画面いっぱいに映し出した映像の、なんといきいき躍動していたことか。

10 作目の共演ということで、百恵と友和が恋人同士という役のイメージは観客の意識に完全に定着していた。また実生活でも恋人らしいとの噂がすっかり広まっており、二人のコンビとしての印象は切っても切り離せないくらいに深まっていた。

その印象を存分に利用して、初めのきっかけから共に朝を迎えるまでの経過は流れるように急速に進む。観る側の心象の上では既に忍と健はカップルになっているのだから、どのようにして惹かれ合ったかなどくだくだ説明する必要はないだろう。二人は初めてのデートの帰りに早くもくちづけを交わしてしまうのだが、それが少しも不自然でない。

事実百恵と友和は愛し合っていたわけであり、忍役、健役の演技もいやがおうにもボルテージが高まる。見交わす視線や身体の触れ合う瞬間の身じろぎに、何とはなくただならぬ心配が忍んでいた。単なる共演者としての恋愛演技に留まらず、気持の地の部分がどこか出ていたのだろう。

その結果、人気スター同士の共演作品に多く見られるそれぞれの熱狂的ファンを刺激しない配慮からオブラートでくるんだ柔な恋愛描写とは違い、愛し合う男女の醸し出す情感がいきいきと伝えられ、全編を通して愛情の絆が力強く表現されるのである。

初めて結ばれる土砂降りの晩、二人は酔っ払って猛スピードで車を飛ばし健のアパートに転がり込む。部屋に入って軽口をききながらほほえみ合い見つめ合うだけで、すんなり抱き合いベッドに倒れ込む。そして翌朝一緒に朝食をとるときには、もうすっかり親密なカップルになっているのである。

加山雄三の『俺の空だけ！ 若大将』、フォー・リーブズの『急げ！ 若者』、草刈正雄の『がんばれ！ 若大将』と軽快なアイドル青春映画を作り、さらには後述する桜田淳子の『愛の嵐の中で』、ピンク・レディーの『ピンク・レディーの 活動大写真』を撮って絶好調の小谷承靖監督の腕も冴えた。

ずっと後の 2004 年に文化庁が韓国で日本映画の特集上映を行った際、日韓が国交を回復した 1965 年から日本映画の上映が解禁された 98 年まで、韓国で全く知られていなかった時代の日本映画 46 本の中で、『あこがれ』『めぐりあい』『兄貴の恋人』『街に泉があった』『俺たちの荒野』『高校生心中 純愛』『遊び』『制服の胸のここには』『涙の

後から微笑みが』『さらば夏の光よ』『突然、嵐のように』といった本書で取り上げた作品も上映された中、韓国の観客に最も高い評価を得たのは『ホワイト・ラブ』だったのである。

## ●対等な立場の百恵と友和

ところで『ホワイト・ラブ』が男女の愛情をみごとに描ききれた背景には、もうひとつの要因があると考えられる。それは、「百恵・友和映画」の系譜の中で初めて男と女が対等の立場にある設定が与えられた点だ。

それまでの各作品では、恋する男女はいつも互いの境遇の隔たりという制約を受けていた。『伊豆の踊子』は一高生と旅芸人の娘。『潮騒』は貧しい漁師と網元の一人娘。『絶唱』は地主の跡取り息子と山番の娘。『風立ちぬ』では健康な青年に対して不治の病・結核に冒された少女。『泥だらけの純情』はヤクザ者と外交官令嬢。『春琴抄』は大きな商家のお嬢さんと使用人。『ふりむけば愛』は普通の中流家庭の娘と気ままな暮らしの大病院の息子。『炎の舞』は同じ地方でありながら海の民、山の民に別れている異なった集落の青年と娘。……みごとに対照的だ。それが『ホワイト・ラブ』では対等の階層であるうえ、忍は父親の不在、健は別れ別れになった恋人との過去という欠損にこだわりを抱えている。

また、百恵と友和の共演歴で初めて俳優として同格に扱われた。歌手としての質、量伴った大活躍があるために山口百恵ばかりがスーパースターだったかのように思われがちだが、前章でも述べたとおり三浦友和も青春スターとして確固たる地位を占めてきていたのである。

この映画を観てすぐ、10月の恋人宣言より前に書いたこの映画評には、79年8月時点でのヴィヴィッドな印象が表れていると思う。離婚したばかりのわたしには、愛情について語ることに苦い気持はあったのだが。

### 【『ホワイト・ラブ』評

今年79年、男女の愛情を扱ったすぐれた映画として、まず曾根中生監督「天使のはらわた・赤い教室」を挙げたいが、それに匹敵する秀作が、この「ホワイト・ラブ」だ。「赤い教室」が、鮮烈な赤のイメージで描かれているとすれば、こちらは透明な白のイメージが貫かれ、その中に愛情の重さ、激しさがこめられている。それぞれに〈愛〉を主題にして、さながら陰画と陽画だ。

脚本・藤田敏八、小林竜雄、監督・小谷承靖という第一線の才能の組み合わせを得て、百恵・友和共演十作記念映画は、それだけの力を内に秘めた作品に仕上がった。山口百恵の魅力を引き出すことが中心で三浦友和はあくまでその相手役、その感が強かった過去の

九作とは違い、両者が等量に扱われているのが効果的だ。むしろ、三浦友和の演じる男の方が、苦い過去を背負っている形で、厚みをおいて表現されている。

父のいない家庭に育ちながら、仕事にうちこんで気丈に生きる女と、昔の愛情の痛みを完全には忘れ去れないでいる男とが、出会い、結ばれる。確とした将来への設計があるわけでもなし、男の昔の恋人が遺した血のつながりのない子をかかえて、彼らの行く手は多難だろう。だが、それを克服するだけの強い愛情の絆があることが、観る側には伝わってくる。二人の間にたゆとっている情感が、みごとに濃密に示されているからだ。

十作めの共演、さらには実生活での恋人同士とさえ噂されている百恵・友和の、切り離せないコンビとしての印象の深さを十分に利して、最初のきっかけから共に朝を迎えるまでの経過は、流れるように急速に進ませている。互いがどのようにして惹かれあうか、などくたくたと説明するまでもなく、観る側の心象の上では、すでに二人はカップルなのだから。抱擁したり、あるいは言い争ったりするときの熱情のたかまりぐあいも、すんなりと受け入れられる。

もちろん、描写も的確だ。男と女の表情、感情を、いささかも見落とさずにいきいきと伝える。たとえば、酒場で語らう場面。女の心を追って、男の視線が一瞬ゆらめく。そのとき、カメラもゆらりと揺れて男の眼を捉えるのだ。ひとつひとつの画像が、周到に積み重ねられて、力強く男と女の結びつきを表している。音声で解釈するまでもなく、画面が語りかけてくる。

話の核となる血液型に関して、完成時のプリントでは重大な誤りがあったのを、わずか三日で修正して封切日に間に合わせた、という。この作者たちの誠実な熱意が、そのまま作品に反映しているのだ。決して手を抜かず、気を入れて創造していく。たしかな伎倆に裏打ちされたそうした熱意があれば、水準の高い仕事に結実しないわけがない。

男女の愛情は、手軽にさらさらとやっつけることができるほどには薄くない。重く、難しく、甘くもあれば苦渋を伴いもする。けれども、だからこそぼくたちは愛情を求め、自ら持とうとする。そうした重い情感の流れに身をゆだねるとき、愛憎いずれにしろ、生きているよろこびを味わう充実感を得られるのだ。こうした活力あふれる〈愛〉の映画に接すると、いっそうその思いは深まる。中に現れる登場人物たちの愛情を傍観して単にカタルシスを覚える、でなしに、自分たち自身の内部に抱えている愛情へ向かう契機を触発されてしまう。青空に描かれる飛行機雲のエンド・マークを眺めながら、すがすがしい刺激を感じた。

(キネマ旬報 1979 年九月下旬号より)

## ● 「百恵・友和映画」、そして 70 年代最後のアイドル映画——『天使を誘惑』

そして恋人宣言に世間が騒然とする中、12 月公開の『天使を誘惑』（79 藤田敏八 脚・

藤田敏八＋小林竜雄（原・高橋三千綱）はさらに強固な共演作となった。『ホワイト・ラブ』に続いて藤田敏八、小林竜雄のコンビが脚本を担当し、今度は藤田自身が監督にも当たっている。前年、江藤潤、永島敏行の『帰らざる日々』、この年、奥田瑛二、森下愛子の『もっとしなやかにもっとしたたかに』、永島敏行、森下愛子の『十八歳、海へ』と青春映画を連打していた藤田は、小谷同様波に乗っている時期だった。さらに、『ふりむけば愛』の大林宣彦監督がプロデューサーを務めている。

キャスティングも特徴的だ。それまでの「百恵・友和映画」では、映画や新劇のベテラン俳優が脇を固めて若い二人を支えてきた。それが『ホワイト・ラブ』では小林桂樹、岩崎加根子、北村和夫のベテランだけでなく、日活ニューアクションの『野良猫ロック』シリーズ70～71の范文雀、東映『暴走族』シリーズ75～76の岩城滉一、日活ロマンポルノ『女教師』の永島暎子が登場する。そしてこの『天使を誘惑』には、火野正平、蟹江敬三、岸部一徳とその後の日本映画界を代表する助演者の若き日の姿が揃い、東映『夜の歌謡シリーズ』で活躍した中島ゆたか、東映『天使の欲望』（79 関本郁夫）で大胆な演技を披露したばかりの結城しのぶ、東京芸大音楽学部から仲代達矢の無名塾に進んだ異色の経歴を持つ神崎愛と、多士済々の顔ぶれとなっている。さらに、往年の東映チャンバラ時代劇の大スター大友柳太朗が老人役で新境地を見せた。そうした意味でも盛り沢山の魅力がある豊かな映画になっている。

『天使を誘惑』は、実質的に最後の「百恵・友和映画」だと言っている。山口百恵の最後の映画出演は次の『古都』（80 市川崑）だが、こちらは幼い頃から別れ別れの双子の姉妹を演じる彼女の二役がポイントで、友和はわずかな役割しか与えられていない。それにこの企画は『伊豆の踊子』と同じ川端康成作品映画化の名作文芸路線であり、岩下志麻の『古都』（63 中村登）のリメイクでもある。文芸リメイクものから現代のナマの若者像へと迫ってきていた「百恵・友和映画」の進展からすると退行しているという意味でも、「山口百恵引退記念映画」との意味しか感じられない。

『天使を誘惑』は、最後の「百恵・友和映画」として、また70年代最後のアイドル青春映画として79年の暮れに封切られた。

浩平（三浦友和）は翻訳の下請けなどして生活しているフリーライターであり、田舎に帰ってしまった恋人・恵子（山口百恵）の実家を彼が訪ねていく場面から映画は始まる。最初から二人は恋人ですぐに同棲関係に至るというわけで、このあたり『ホワイト・ラブ』の続編のような気味さえある。

恵子はデパートに勤めていたのだが、職場の上司・岩淵（津川雅彦）との仲を浩平から誤解されて喧嘩していたところへ当の岩淵から売上金が足りないのを泥棒呼ばわりされてカッとなり、実家へ帰ってきていたのだ。警官をしている実直な兄（蟹江敬三）の勧める相手である県会議員の息子（岸部一徳）と引き合わされる当夜に浩平が現れたことからちょっとした騒ぎとなり、縁談は破談になった。恵子は浩平と一緒に東京に戻り、二人の同

棲生活が始まる。稼ぎのない上に空き巣に入られてしまった浩平を支えるため、恵子はウエイトレスとして働き始める。

浩平と恵子は、揃って浩平の友人・松田（火野正平）の結婚披露宴に出席した。二人を最初に引き合わせたのが、デパートで恵子の同僚だったこの松田なのだった。その席で恵子に軽口をきいた岩淵に浩平が喧嘩を売り、大立ちまわりを演じ警察沙汰になった。騒動の責任を取らされ岩淵は左遷されたが、同時に恵子の小学校時代からの友人である同僚・妙子（神崎愛）も何処かへ姿を消す。岩淵の浮気の相手は彼女だったのだ。

浩平は、売れない文筆業でこれといった将来の展望もない上、正式の結婚も子どもを作る気もない。それでも恵子は、社会や家庭に縛られることなく自分の納得のいく仕事をしたがっている彼の考えを容認し、新たな仕事を見つけて家計を支えるだけでなく、浩平の父親（大友柳太朗）が転がり込んでくれば嫌がらずに面倒を見る。

浩平はいつしかそんな彼女にすっかり甘えてしまう。郊外で一人暮らしの彼の父親は、突然アパートにやってきたかと思うと、やはり行き場がなく訪ねてきた妙子といつのまにか懇ろになり自宅に連れ帰って同棲するようなユニークな老人だが、それも恵子に任せきりだ。それでいて自分は、女編集者（中島ゆたか）と夜を共にして朝帰りする有様だ。恵子はそれさえも、感づいていながら許す。

そんなとき、新婚の松田が浩平に泣きついてきた。結婚前付き合っていた女に、あなたの子どもができたと迫られているという。弱り切った松田に頼まれ、浩平はその女フミ子（結城しのぶ）と交渉してやることになる。

ちょうどその頃、恵子も妊娠していたのである。子どもは要らないという浩平の考えを知っている彼女は、誰にも知らせることなく一人で決断して墮胎してしまう。何も気づかず事後に知らされた浩平は、彼女を責める資格がないのを自覚しながらも、勝手に決めるなど詰る。これを契機に、初めて二人は互いの全てをさらけ出す。浩平は自分の人生に対する考えを奥底まではっきりと表明するし、恵子は彼女の人格形成に大きな影響を与えた子どもの頃の事件について話す。その結果、二人はようやく本当に解り合えた気になった。

浩平は、松田の代わりにフミ子の墮胎に立ち会った。自分の子は知らないうちに失ってしまったというのに、他人の子のときに身替わりで中絶同意書を書き一緒に病院に行く羽目になるとは皮肉である。

それからしばらくしたある日、恵子と正式に結婚する決意をして区役所から婚姻届用紙をもらって帰ってきた浩平を部屋で待っていたのはフミ子だった。ワルぶっていたこの女も淋しい気持でいたらしく、手術後身体が回復すると浩平に会いたくなって訪ねてきたのだという。で、恵子と鉢合わせし、つい、浩平が書いた同意書を自分と彼との間の子のものであるかのように見せつけてしまったのだった。

恵子は身の回りの荷物を手に飛び出して行ったという。浩平は激怒し、思わずフミ子を殴った。すぐ表へ出て、降りしきる雪の中をこけつまろびつ恵子の姿を求めて走り回る。



大通りにもいない。駅にもいない。公園にもいない。途方に暮れかけていたとき、...いた！雪を避けとある軒下に佇んでいた恵子を見つけ、浩平は全力で駆け寄っていく。

エピローグ。近所の公園の一角で、浩平が若い男たちに殴る蹴るの暴行を受けている。フミ子の仕返しだ。浩平は抵抗しようともせず、なすがままにされている。満足したフミ子たちが立ち去るところへ恵子が通りかかった。痛みに歯を食いしばりながら自分の力だけで立ち上がる浩平を、恵子は手を貸さずにじっと見守っている。立ち上がってさっぱりした表情の浩平は恵子に気づいてほほえみかけ、彼女はその笑顔をしっかりとして受け止める。二人の間には、揺るぎない信頼が横たわっている。

三浦友和の浩平は、世間の常識との摩擦を恐れず自分たち固有の生きる姿勢を大事にしていこうとする。彼の愛する恵子という女性は、単に心優しいだけでなく性根の座ったところを持っている。控えめにしているものの、いざとなると浩平に対して少しもひけを取らない。どんなことがあっても、たじろぐことなく彼についていく。浩平が空き巣に所持金のほとんどを盗まれたときは、自分の全財産をポンと出して助ける。結婚パーティ会場で暴れて弁償させられたときは、「いいじゃない。気持ちがスカッとしたんでしょ。高いレクリエーション代についたけど」と笑って慰める。

作品全体のモチーフのように繰り返し紹介される恵子の小学生時代の作文「あたしは将来、およめさんになりたいと思います。まい朝おとうふのおみそ汁を作って元気でいてもらいたいとおもいます。ばんごはんのときにはお酒ものみませす...」が示す大人びたひたむきさが、彼女の容易にくじけない意思の原点になっているかのようだ。

山口百恵自身、中学生の身で歌謡界のスターとなった時分から年齢の割に落ち着いた佇まいが指摘されており、長じるにつれ、14歳年長の阿木耀子が描くオトナの女の心理に拠った歌詞をみごとに歌いこなした。「横須賀ストーリー」を17歳で、「イミテーション・ゴールド」を18歳で、「プレイバック Part2」を19歳で歌い上げているのである。

スクリーンの中でも、少女の容姿を残しながら常にどこか大人びた雰囲気漂わせていた。特に後期の『霧の旗』あたりでは堂々たる女優ぶりになってきていた。『ホワイ・ラブ』で初めて等身大の自分と重なり合うような役柄を演じた後、さらにそれを深め引退後の三浦友和との結婚生活まで髣髴とさせる女性像が『天使を誘惑』の恵子なのである。

愛する者のために真一文字に進んでいく。大好きな父親の悪口を言った同級生の男の子を線路に突き落とした少女時代の恵子のひたむきさが、今は浩平に向けられ彼を支えてくれる。恵子＝山口百恵こそ「天使」である。そして、浩平＝三浦友和はその「天使」を「誘惑」したのである。

1980年12月6日公開の引退記念映画『古都』に先立ち、11月19日に山口百恵は三浦友和と結婚し、芸能界を完全に引退した。

## ●森昌子の代表作——『どんぐりっ子』

百恵と共に「花のトリオ」を形成していた2人についてもその後の活躍ぶりを記しておこう。

森昌子は、百恵が引退した後もNHK紅白歌合戦13回連続出場を果たすなど歌手として活躍し、81年には「哀しみ本線日本海」でトリを務めた。86年に歌手の森進一と結婚、引退するが後に復帰している。

映画も、トリオでの『花の高2トリオ 初恋時代』の後、東宝で『どんぐりッ子』（76 西河克己 脚・須崎勝弥 原・由起しげ子）、『お嫁に行きます』（78 西河克己）の2本に単独主演している。

特に「森昌子芸能生活五周年記念映画」と銘打った『どんぐりッ子』は、彼女の映画における代表作と言っていい佳作である。原作は由起しげ子「女中ッ子」で、左幸子主演の『女中ッ子』（55 田坂具隆 キネマ旬報ベストテン7位）のリメイクなのだが、「女中」が職業差別用語視されるようになっていたため題名を変更している。

はつ（森昌子）は、山形から出てきた方言丸出しのお手伝いさんだ。加治木夫妻（長門裕之・南田洋子）の家に住み込みで働き、主に3人の子どもの世話をしている。特に暴れん坊で僻みっぽい次男（当時天才子役と呼ばれた松田洋治）を温かく見守り、彼の良さを認める。また、自閉症の末娘の心を開かせ、次第に子どもたちにとってなくてはならぬ存在になっていくのだった。しかし、次男が隠れて飼っていた子犬をめぐるトラブルの責任を被り、はつは加治木家を去らねばならなくなる。子どもたちのことを思いながら、彼女は山形へ帰っていくのだった。

この作品が問いかける都会と田舎というテーマは、高度経済成長が一段落したこの時代には都会＝繁栄、田舎＝衰退の形で立場が固定化しつつあった。人口減と少子高齢化で田舎が減びていくとされる現在の「消滅自治体」問題ほどでないにしても、両者の間の格差が明確に認識され始めていた。この意識差を埋めるために「女中」が「お手伝いさん」になったり「百姓」が「農業者」になったりする言葉の置き換えが盛んになるのもこの頃である。

70年代には「裏日本」が「日本海側」になり、その頃あった都内の郵便ポストの分別投函口（現在は郵便物のサイズで分別）の「都内」「地方」という区分けに苦情が出たりもした。そんな状況をふまえて、当時のわたしはこの映画をこんなふうに評して、年度末には76年度ベストテンの7位に選んでいる。

#### 【『どんぐりッ子』評

映画好きであることの楽しみのひとつは、期待せずに観た作品が、自分にとって思わぬ拾い物だったときだ。評判にもならず、見過ごされていく中から、心に響くものを掴み取れる。森昌子芸能生活五周年記念映画「どんぐりッ子」は、その幸福感をぼくたちにもた

らしてくれた。

それにしても西河克己監督、四〇年も年若の少女歌手の持ち味を、たくみに把握するには驚かされる。「伊豆の踊子」で山口百恵を旅芸人の少女に重ね合わせて、引き締まった空気をみなぎらせた。ここでは森昌子を、山出しのお手伝いさんに重ね合わせ、素朴さ、純真さ、健康さを、彼女の個性として俎上に載せる。

美麗に見せようとしたり、優雅に扱おうとしたりしない。オーバーでも控えめでもなく、過不足抜きなたしかな眼で、山間も村の娘らしく描き出す。作中のせりふを借りれば”イモ姐ちゃん”（いやな言葉だけれど）そのままに捉えている。だが、それが、画面の暖かさをかもし出すのだ。

イモ姐ちゃん、などという言葉に表象されるように、われわれは、何かというと田舎を貶めている。都会に住む人間は、愚かな優越感をちらつかせながら田舎、田舎者と、馬鹿にしてしまいがちだ。田舎の人たち自身までが、自ら卑下する傾向さえ見られる。つまらないこだわりだ。

森昌子と、長門裕之、南田洋子夫妻の家庭の人々の織りなす対照は、そのことを、いっそう鮮やかに感じさせる。都会の殺伐なせせこましさと、田舎ののびやかな大らかさ、と、いった、ありきたりの対比ではない。前者を否定、後者を肯定の教訓的図式ではないのだ。現実には、両者に一長一短あるのだから。

田舎の〈暖かさ〉を、この張り切りお手伝いさんは体現する。自閉症の女の子を力づけるためには、スカートをたくし上げて太腿の傷あとを見せるし、出べそまで披露してしまう〈暖かさ〉。

対して都会は〈やさしさ〉だ。男の子が、不意に誕生祝いをしてくれるところなど、まさに、その表れだ。けれども、〈やさしさ〉は、軽薄な半面を持つ。〈暖かさ〉に応えられるほどの厚みがない。少女は淋しく山へ戻らねばならないことになる。

ぼくたちの抛る〈やさしさ〉が行き詰まりかけている今、〈暖かさ〉について、考えている必要があるのではないか。そこから、新しいつながりが生まれてくるのではないか。つまらないこだわり——「女中っ子」が「どんぐりっ子」とされねばならない状況をも解消できるのではないか。

そんな思いを、森昌子と松田洋治少年のコンビは、投げかけてくれる。この作品に類した試みを、頭から拒む向きもあるだろうが、ぼくは素直に受け入れたい。そして、自分の愛している人たちに、ぜひ観るよう勧めたい気持ちになっている。

（キネマ旬報 76 年九月下旬号より）】

## ●アイドル時代の淳子最後の主演作——『愛の嵐の中で』

桜田淳子は、82 年まで紅白歌合戦連続出場をするなど歌手活動を行っていたが、83 年

を最後に新曲を出さず、俳優の道へと進んでいく。テレビや舞台で活躍し、映画でも『イタズ 熊』（87 後藤俊夫）、『お引越し』（93 相米慎二）で2度にわたりキネマ旬報助演女優賞を受け、その演技力を高く評価されている。

アイドル時代にも、『花の高2トリオ 初恋時代』の後、松竹『男はつらいよ 葛飾立志篇』（75 山田洋次）でこの人気シリーズにゲスト出演、松竹『遺書 白い少女』（76 中村登）、東宝『若い人』（77 河崎義祐）、松竹『愛情の設計』（77 山根成之）と主演作も続く。ただ、ヒロインや相手役が不治の病に冒されるなど題材があまりにも定型的な話で、未熟だった淳子の演技のわざとらしさと相俟って映画としての魅力に欠けた。

この時期の彼女の代表作は、アイドルとしての最後の主演作となった東宝『愛の嵐の中で』（78 小谷承靖 脚・白坂依志夫+安本莞二）である。それまでの主演作が原作ものばかりだったのに対し、これは白坂依志夫と安本莞二によるオリジナル脚本で淳子の持ち味を生かすことに成功している。

話はミステリー仕立てだ。パリでバレエの修業をしていた夏子（桜田淳子）は、スタイリストをしていた姉の雪子（夏純子）が自殺したとの報せを受け日本に帰る。妊娠3ヶ月だったという姉は遺書をのこし崖から飛び降りたというが、夏子には信じられない。姉の死の真相とお腹の子の父親を探るうち何者かに襲われ、ますます疑惑は深まる。ニュースキャスター（中村敦夫）、自動車ブローカー（岸部四郎）、前衛芝居俳優（田中邦衛）、男性美容師（岸田森）など姉と接点があった男はどれも一癖ありそうで怪しい。夏子はカメラマンの佐伯（篠田三郎）の助けを借りて謎に挑んでいく……。

70年代末は、カタカナ職業をはじめとする実業ならぬ「虚業」がいろんな形で現れ始めた頃でもある。この映画はそんな世界に桜田淳子を持って行くことで、彼女のアイドルとしての魅力を引き出すとともに時代の気分を描き取った。次に掲げるのが、公開時におけるわたしの批評である。この作品は、78年度ベストテンの8位に選んだ。

#### 【『愛の嵐の中で』評

桜田淳子は、ライバル山口百恵とは、いかにも対照的だ。たとえば水着姿のオーディションに巻き込まれる場面、彼女の肢体は、色あくまで白く華奢な造りだ。表情は、小賢しいまでに器用な豊かさで動く。鈍重ささえ覚えさせるほどの〈自然〉の魅力で今や存在感あふれる女優に成長した山口百恵に対し、桜田淳子には、どうしても〈人工〉の雰囲気を感じられ、前者を〈実〉とするならば、〈虚〉のにおいが強い。

その、いわば〈虚〉の個性を、この映画の作者たちは、みごとに生かしきっている。まず、彼女を囲む作品世界を、徹底した〈虚〉の空間として描いてみせる。バレリーナ、スタイリスト、写真家、外車のセールスマン、TV司会者、男性美容師、宣伝マン——登場人物たちは皆、虚業と呼ばれる職業だ。黄色のポルシェを始めとして、小道具も華麗だし、清潔な色を基調にしたセットも洒落ている。

加えて、物語は推理もの仕立ての気の利いた虚構だ。そうした〈虚〉の世界の中で、桜田淳子は水を得た魚のように躍動する。

さらに、彼女の周りには、中村敦夫、岸田森、地井武男、田中邦衛と、老練の俳優たちを配して、未熟な芝居を余裕綽々に受け止めさせている。そして、今まで鼻についていた芝居っ気たっぷりの演技に関しては、彼女が姉を殺した犯人を見つけるためにいろいろな嘘を重ねる、との設定で劇中に劇を演じさせる形をとったりして、その不自然さを逆手に取って利用してしまうのだ。

よりすぐれた映画作りをめざして不断に努力している跡が見える作者たちの姿勢は、逞しく貪欲なまでだ。素材であるスターの持ち味を十分に発露させ、細かく心を配った表現で緊迫した面白さに満ちた作品を見せてくれる。「急げ！ 若者」(74)でフォー・リーブスと郷ひろみという偶像(アイドル)に生命を吹き込み、若さの持つ苦さを活写した小谷承靖監督以下のチームならではの所業だ。岸田森に、当たり役だった吸血鬼のパロディをやらせる遊びの余裕すらみせる。

で、こうして構えられた〈虚〉のあわいから、人と人との絆とは何か、がくつきりと浮かび上がってくる。殺された姉。それを取りまいていた男たちの語る人間像は、それぞれに違う。ある者は奔放だったと言うし、またある者は吝嗇だったと回想する。追っていくうち、妹にすら、自分にははっきりわかっていたつもりの姉の姿が幻めいて思えてくるのだ。友人、恋人、姉妹のつながりの間でも決して知ることのできない部分、容喙できないところが厳然と存在する。

それは愛情にしても同じだ。姉と中村敦夫の愛の在り方は、若い妹には初め理解し得ない。だが”愛の嵐の中で”揉まれた末、終幕、大人の愛を知る。他者からは論評したりする余地のない、当事者二人だけのそれを。姉たちへの弔いの花を投じ、自分自身の大人への道を踏みだすとき、彼女は、りりしく美しい。

(キネマ旬報 78年6月下旬号より)】

山口百恵の活躍ぶりが伝説化するほど大きかったとはいえ、後の2人も十分な人気を得ており、「花のトリオ」は70年代を通してアイドルの座にあり続けたのである。